

「人類学 back home」に向けて

著者	片岡 樹
雑誌名	民博通信 Online
巻	167
ページ	14-15
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.15021/00009688

「人類学 back home」に向けて

文・写真 片岡 樹

海外研究からの日本回帰

本共同研究の目的は、国外フィールドでの民族誌的経験を通して、文化人類学による日本社会／文化理解の新たな視角を提案することである。我が国における文化人類学は、戦後しばらくまでの時期を除けば、おもに国外フィールドに基づく異文化理解の学として発展してきた。異文化理解とは異文化を自文化と参照する営為であるため、それは必然的に一種の自文化論となる。ただしこの自文化論はほとんどの場合、研究者自身にとっても十分に意識化されることはなく、あくまで民族誌の行間に埋め込まれている。しかし実際には、梅棹忠夫や佐々木高明、中根千枝の例が示すように、日本の人類学には、海外ですぐれた民族誌的研究を行ってきた人類学者が日本文化に関するユニークな仮説を提案するという良質な知的伝統が存在する。本共同研究では、そうした伝統を新たに継承すべく、国外での民族誌的研究の経験を重ねてきた研究者たちが、暗黙裡の参照項として措定してきた日本文化を対象化することで、国外フィールド発の日本研究の新たな可能性を提示したい。

本共同研究プロジェクトの意義は、おもに次の2点である。

第1に、人類学の国内回帰自体は、ポストコロナル批判以降の先進国でも見られたが、そこには、海外フィールドでの政治的な批判から逃げ帰るという意味での消極的な動機に基づく面が少なからず見られたように思われる。それに対し本研究では、海外フィールドで広げた視野を積極的に国内研究にフィードバックすることで新たな知見を提案することをめざすものである。

第2の意義は、日本民俗学、社会学、異文化研究型の人類学がいずれもとどこぼしてきたニッチをおさえることである。日本民俗学は日本国内で自己完結する純粋文化を想定し、海外の視点を忌避する傾向が強い。社会学は欧米近代市民社会のモデルを機械的に日本の現状にあてはめる傾向が強く、また異文化研究に特化したここ半世紀ほどの日本の人類学においては、日本の研究自体が総じて後回しとされてきた。本研究は、これらのいずれからもこぼれ落ちるニッチに秘められた豊かな可能性を発掘するための試みである。

海外フィールド経験の「逆さ読み」と「人類学 back home」

人類学者による日本再発見の試みは、前述したように、本共同研究が初めてというわけではない。文化人類学の学会誌でも、2001年に「人類学 at home」(『民族学研究』65巻4号)、2006年に「日本のネイティブ人類学」(『文化人類学』71巻2号)という特集が組まれている。「人類学 at home」では、ポストコロナル批判以降の西欧人類学における自国回帰傾向(マーカス/フィッシャー 1989)を受け、日本での自国回帰を図る場合の特殊事情として、民俗学がすでにそのニッチを占めている点に注意を喚起し、日本民俗学との対話の可能性が模索されている。もうひとつの「日本のネイティブ人類学」では、その反対に、日本の人類学者は海外の日本研究者といかに有益な対話をなすうるか、という争点が主題となっている。

それらに対し、本共同研究では、海外フィールドの知見を日本にもち帰ることで、新たな角度から日本文化をとらえなおすこと、つまり「人類学 back home」の提案を試みる。そこでカギとなるのが、ネイティブ人類学特集の寄稿者である桑山(2008)が提唱する、民族誌の「逆さ読み」である。たとえば、アメリカで出版された日本文化に関する研究は、アメリカ人から見た異文化の所在を示しているものであり、そのため、アメリカ人にとって何があたりまえで、何がエキゾチックなのかについての自画像としても、つまりアメリカ人によるアメリカ文化論の書物としても読むことができる。そうした読み方を、桑山は「逆さ読み」と呼んでいる。だとすれば、我々が日本語で書いてきた海外文化論もまた、日本人から見た異文化のリストである以上、それらはじつは「逆さ読み」の日本論だった、ということにもなるだろう。我々が海外フィールドで無意識に行ってきた自文化の「逆さ読み」を、意識的に日本のフィールドにフィードバックすること、これこそが、我々の提唱する「人類学 back home」である。

「逆さ読み」からの日本論へ

では海外フィールドの「逆さ読み」とは具体的には何を意味するのか。ここでは一例として、共同研究代表者である私の経験を書かせていただきたい。私はこれまで、タイ国をおもなフィールドとしてきた。近年ではとくにタイ国の中国廓

片岡 樹（かたおか たつき）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。専門は文化人類学、東南アジア研究。著書に『タイ山地一神教徒の民族誌—キリスト教徒ラフの国家・民族・文化』（風響社 2007年）、『アジアの人類学』（共編 春風社 2013年）などがある。



峠の辻で祀られる山の神さん。実際に訪ねてみたらご神体が仏像だった、というケースはまま見られる。海外フィールドの経験から、神仏分離はけっしてあたりまえでない学び、自分自身が近代日本国家のイデオロギーに無自覚に呪縛されてきたことに気づいたとき、こうした神や仏が無数に存在することがにわかには視界に飛び込んでくるのである（2018年1月7日、愛媛県今治市菊間町）。

を調査しているのだが、そこでのいくつかの発見は、日本文化に対する自分の視点が同時に問われるものであることに気づいた。そのひとつは、神前読経や神仏習合である。タイ国では、神々を祀る廟の年中行事に近くの仏教寺院から僧侶が招かれて読経が行われる風景をしばしば目にする。またそうした廟では、神々とともに観音や薬師、弥勒などの仏たちもあわせて祀られている。そこで私は、神を祀るのになぜ僧侶の読経が求められるのか、なぜ神と仏をごちゃ混ぜに祀るのか、そもそもこれは「なに教」の施設なのか、ということがわからず、当初はひどい違和感を覚えた。

しかし途中で気づいたのは、そうした違和感というのが、神と仏は厳密に区別されなければならないと考える自分自身の認識に由来しているということである。これはつまり、明治初年の神仏分離によってつくられた近代日本のイデオロギーを、自分自身があまりに深く内面化しているがゆえのカルチャーショックだったということができる。ならば、そうしたタイ国の中国廟へのカルチャーショックを逆方向に読み解いていけば、それはそのまま近代日本における「宗教」の翻訳と制度化を批判的にとらえなおす出発点となるはずである。実際に自分自身が内面化してきたバイアスに自覚的になることで、日本の身の回りでも、これまで視野に入ってきた神仏習合の痕跡が明確に見えてくるようになったのである。

これはあくまで一例に過ぎないが、そうした経験をもち寄ることで、日本のあたりまえを疑ったり、あるいは日本で奇

妙に見える現象が、じつはアジアの近代国家形成に共通する問題を背景にしていたりすることが見えてくる。本共同研究が構想する「逆さ読み」とは、まさにそうした作業の集積から日本文化なるものをとらえなおす試みなのである。

「逆さ読み」の複数のかたち

本共同研究は、これまでおもにアジア・アフリカの海外フィールドで調査を行い、現在では日本の研究にも着手している人類学者を中心に組織してすすめていく。しかし海外フィールドと国内フィールドの往還から日本研究への新たなアプローチをさぐる、という問題意識を共有する人はそのほかにもいるはずである。たとえば、日本に留学し、日本人の読者を対象に自文化（自国）研究にたずさわる外国出身研究者は、その時点ですでに幾重もの「逆さ読み」を自身の研究活動のなかに畳み込んでいるだろう。これは、海外で海外の読者や聴衆を対象に日本研究に従事した経験をもつ日本人研究者についても同様である。そのほか、これまで日本国内で日本研究に従事していて、のちに海外調査にも着手し始めた研究者もまた、海外フィールドの経験を介して、それまで作り上げてきた日本文化観が修正されていく、という意味では、やはり「逆さ読み」の経験を共有している。

本共同研究では、そうした類似の（しかし出発点において異なった）経験を有する研究者たちを随時ゲスト講師として招くことで、複数の「逆さ読み」が交錯する視線の先に、これまで見えてこなかった日本文化の姿を描いてみようと考えている。その成果については、共同研究期間の終盤において、公開シンポジウムの形式で幅広い聴衆と共有し、アジア・アフリカ地域の文化に興味をもつ人びとに対しては、同地域でのフィールド経験が、そのまま日本文化への洞察として働かせること、また日本文化に興味をもつ人びとに対しては、海外からの「逆さ読み」から自文化への新たな視点が開けうることを示したい。

引用文献

- 桑山敬己 2008『ネイティブの人類学と民俗学—知の世界システムと日本』東京：弘文堂。
- マーカス、G. E. / M. M. J. フィッシャー 1989『文化批判としての人類学—人間科学における実験的試み』永淵康之訳、東京：紀伊國屋書店。